

在外研修の成果

唐日陶磁の比較研究

異 淳一郎／飛鳥藤原宮跡発掘調査部

1999年10月1日～12月19日の間、受け入れ機関の陝西省考古研究所を拠点に、中国唐代の陶磁の見分と、それに関する情報を収集した。ここでは奈良三彩と深い関係にある唐三彩に関する新知見の一端を紹介しよう。

唐三彩の窯場として知られる陝西省銅川市黄堡鎮窯・河南省鞏義市黄冶窯・同洛陽市洛陽城内窯・河北省内丘県邢窯の4箇所の他、長安城禮泉坊内で窯が新発見され、陝西省考古研究所によって調査が行われている。

唐三彩には、白色瓷土を胎とするものと、紅色胎に白化粧を加えた素地の兩種があり、後者の窯場は未確認であった。実は、禮泉坊内窯では専ら後者の素地を用いた唐三彩が焼造されている。生産器種は、小型の日常什器・小型甕・僧形甕などで、陝北の皇陵陪葬墓に納められた大型甕等はみかけず、同時に緑釉・褐釉・黒釉・白釉・彩陶の日常什器も焼成しており、官窯ではなく、長安城内西部の住民の需要に応じた民窯と考えられている。

食器組成に関する研究

安田龍太郎／飛鳥藤原宮跡発掘調査部

1999年8月2日から10月10日にかけてギリシャ・トルコ・エジプト・イギリスを訪れた。アナトリア西部・エーゲ海沿いの遺跡と博物館を訪れ、食器・台所用具を重点に調査を行った。

新石器時代からローマ時代にいたる土器のうち圧巻は紀元前6～4世紀のギリシャ陶器である。様々な生活場面の描かれる黒絵・赤絵が、日本の絵巻物のように当時の社会復原に貴重な資料であることを実感した。食器は用途に対応し形態が異なり、名称が決っていた。アテネのアゴラなどで出土した台所の土器には、フライパン、煮炊き用の鍋・釜、移動式のカマド、方形・円形のグリルなどがある。グリルは中国の新石器時代の奘奘と類似する。片手付の釜には同形態で大小何種類かがあり、器種分化に通ずる。イギリスの博物館ではローマ時代の立体的な展示が盛んであり、台所の復原展示を何カ所かで見る事ができた。今回の研修で、食文化の相異による食器の違い、土器が社会で占める重要性を再確認した。